

受賞のことば

中小企業金融のあるべき姿を考える

一橋大学教授 植杉 威一郎

中小企業は、日本の企業の中でも企業数で99%超、雇用の約7割、付加価値で約5割を占める存在であり、そのパフォーマンスが日本経済の動向に直結する。一方で、大企業と比較した中小企業の生産性の低さが問題視されている。

このように多義的な存在である中小企業にとって、金融はその存続を左右する重要な意味をもつ。今回のコロナ禍では、政府が起点となり金融機関が行った潤沢かつ迅速な資金繰り支援により、倒産件数は極めて低い水準に抑えられ、中小企業の存続可能性を高める上での金融の意義が改めて明らかになった。しかしながら、それだけが中小企業金融の役割ではない。

本書は、中小企業金融が短期的な流動性供給に加えて経済全体の成長に寄与する効率的な資金配分を行っているかどうかについてのエビデンスを、現在の日本で得られるほぼ最大限のデータを用いつつ、様々な角度から検証した上で示した。

中小企業金融には、「中小企業におけるゾンビ企業はどの程度存在するか」、「信用保証や政府系金融機関による貸出にはどのような効果があるのか」、「銀行合併は企業の資金繰りを悪化させるのか」、「金融機関は越境貸出をどの程度行っているのか」など、分かっているようでいて実は分かっていない研究上の問いが多い。そこで、企業・地域での資金配分の規模と効率性、政府の役割、貸出市場における金融機関の行動という3つの分野に多岐にわたる問いを整理した上で、答えを提示した。

過去30年間の日本経済を振り返ると、コロナ禍だけでなく1990年代末の日本における金融危機、2008年秋以降の世界金融危機、2011年の東日本大震災などの危機が頻発し、平常時との境目が曖昧になっている。危機時に前例を拡充した金融支援策が講じられ、時間をかけて平時の措置に戻しても間もなく次の危機が来る、という事態に陥りやすい。こうした状況下では、政府による関与や民間金融機関の行動を評価する上でも、平時を含む中長期のデータに基づくエビデンスを示すことの重要性は高い。

あるべき中小企業金融の姿についての議論が、この書物を通じて活発になるようなことがあれば、著者にとってこれ以上ない幸いである。

うえすぎ いいちろう

1993年東京大卒、2000年米カリフォルニア大サンディエゴ校から Ph. D. (経済学)取得。中小企業庁などを経て15年から一橋大経済研究所教授。69年生まれ。

